

資料を的確に読み取り、様々な情報を関連付けて考える生徒の育成

南魚沼市立大和中学校

今井 晴基 (H24年度)

I. 主題設定の理由

昨年度、本校に赴任し、まず問題だと感じたことは、各種テストの結果から分かった学力の低さもさることながら、そもそも学習への意欲が非常に低い生徒が多いことであった。どうしたら、この子たちに、前向きに学習に取り組ませ、学習の理解を深めさせることができるだろうか。それが本実践の出発点である。

学習意欲の向上とは、生徒が学習することに価値を見出し、主体的に学ぶ姿勢を持つことだと考える。そのような姿を実現するために、社会的事象が成り立つ要因や、他の社会的事象との関連を自ら見出したり、それらと自分とのつながりに気付いたりすることができるような学習課題や活動が欠かせない。そのような学習活動の中では、様々な資料から的確に読み取り表現する力や、読み取った情報と情報、情報と既習事項等とを関連付ける力が必要だと考え、本主題を設定した。

II. 実践の概要

- (1) 実施期間 令和4年度7月～令和4年度9月
- (2) 対象 2年1組、2年2組の生徒(60名)
- (3) 指導単元 地理的分野 日本の諸地域①九州地方(全5時間)
- (4) 単元計画

【学習課題】「九州地方の人々はどの程度自然を克服できたと言えるだろう」

学習内容	各次の学習課題	生徒に与えたトピック
① 自然環境の特色	九州地方の地形や気候にはどのような特色があるだろう。	・地形の特色 ・気候の特色
② 自然環境への対策	九州地方の自然環境の中で、人々はどのような工夫をしながら暮らしているのだろう。	・火山や地形との関係 ・気候との関係
③ 自然環境への適応	九州地方では、人々はどのように自然のめぐみを利用したり、自然条件に適応したりしているのだろう。	・資源・エネルギーへの利用 ・農業の工夫 ・自然を生かした観光業
④ 環境保全と産業の発展の両立	九州地方では、自然環境の保全と産業の発展とを両立させるためにどのような取組が行われているのだろう。	・北九州市の取組 ・水俣市の取組
⑤ 九州地方のまとめ	九州地方の人々はどの程度自然を克服できたと言えるだろう。	

(5) 生徒の実態

2年1組は31名、2年2組は29名の学級である。両クラスともほぼ全ての生徒が、指示された学習に取り組むことができるが、授業に集中できない生徒も散見される。また、教師の質問に対

し、積極的に答える生徒が数名おり、その発言をもとに授業を進めることができているが、積極的に発言する生徒は一部に限られ、受動的な学習になっている生徒が多い。

また、授業の様子や各種テスト、授業アンケートの結果（表1）から、資料から必要な情報を読み取ること、知識と知識を関連付けること、学習課題に対し自分なりの考えをもつことができていない生徒が多い。

NRT（令和4年4月実施）の偏差値平均は、1組44.4、2組45.3である。

【表1 授業アンケートの結果（令和4年4月実施）】

質問項目(要約) (肯定的回答←1・2・3・4→否定的回答)	4月(%)			
	1	2	3	4
A 資料から情報を正しく読み取ることができていますか。	10	58	23	8
B 自分なりの考えをもつことができていますか。	12	45	35	8
C 複数の情報を関連付けて考えることができていますか。	8	32	43	17

III. 実践の具体的内容

1. 生徒が自ら進める授業形態の工夫～授業のユニット化～

生徒が自ら学習を進められるよう、資料（文章や地図、グラフ、表など）を自ら読み取り、必要な情報を整理する学習活動を中心とした授業形態とすることとする。学習内容（Ⅱ(4)参照）ごとに3つの活動（パーツ）を組織し、それらを組み合わせて（ユニット化）、授業を展開することを生徒に伝え、取り組みやすくするとともに学習の見通しを持たせる。

学習活動(パーツ)	活動内容	資料の読み取りを促す工夫
調査	教師が与えるトピックをもとに、教科書を中心に、タブレット端末も使用しながら必要な情報を集める。	<ul style="list-style-type: none"> ・班活動（3,4人）とし、自由に話し合ったり協力したりして進めさせる。 ・班長が班員の進捗状況を確認し、サポートする
整理	調査した内容を、自分でワークシートにまとめ、その後、班で協力して整理する。	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が適宜助言したり、参考になるウェブサイトを紹介したりする。 ・机間指導を行い、活動に困難を抱える生徒を支援する。
共有	各班が整理した内容をタブレット端末により学級全体で共有する。	<ul style="list-style-type: none"> ・足りない知識等は教師が補足する。

「調査」の段階では、与えられたトピックに沿って、各次の学習課題（Ⅱ(4)参照）につながりそうな情報を自分で集め、その中から必要なものを自ら取捨選択する。その際、与えるトピックを教科書とリンクさせることで、情報を読み取りやすくさせる。教科書を中心に調査を進め、その中で、意味の分からない言葉や補足情報をタブレット端末で検索するようにさせる。

「整理」の段階では、それぞれが「調査」で読み取った情報を班で持ち寄り、各次の学習課題につながる情報を補足し合う。どの情報が必要か判断することができず、書けない生徒もこの段階で、他の生徒からの情報を受け、自分のワークシートに記入することができる。また、「この情報を取り上げればよかったのか」と班員を情報の読み取りの手本とすることで次時につなげる。

「共有」の段階では、「整理」で班ごとにまとめたワークシートをタブレット端末で撮影し、そ

の写真を教師のタブレット端末に送信させ、8班から集まった全ての写真を教師から全員に送信した。他の班がどのようにまとめているのかを確認し、自分の班で読み取れなかった情報をワークシートに補足させる。

生徒が情報を読み取り（わからなければ聞き）、班での整理、学級での共有を経て、その読み取った内容が妥当であったのかを確認することを繰り返すことで、資料を読み取る力が向上していくと考えた。

2. 考えを総合しなければ述べられない学習課題の設定

本題単元は、地域の特徴的な社会的事象を中核として、他の様々な社会的事象と関連付けてとらえることを目的としている。この小単元では、火山活動に由来する地形や温暖多雨の気候からなる自然環境を中核として、九州地方の産業や生活、文化などの特色および地域の課題について関連付けながら地域的特色としてとらえることを目指し、学習課題を「九州地方の人々ほどのくらい自然を克服したと言えるだろう?」とする。また、学習課題の解決に向け、II(4)で述べた学習課題を総合的にとらえ、関連付けて判断できるよう、各学習内容について南魚沼市と対比させることで、生徒が九州地方と自分とのつながりを感じながら、学習を進めることにする。

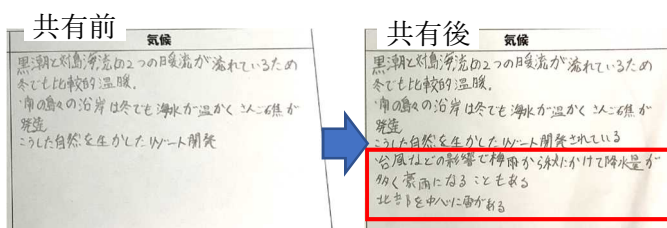
IV. 実践の実際と評価

1. 生徒が自ら進める授業形態の工夫～授業のユニット化～

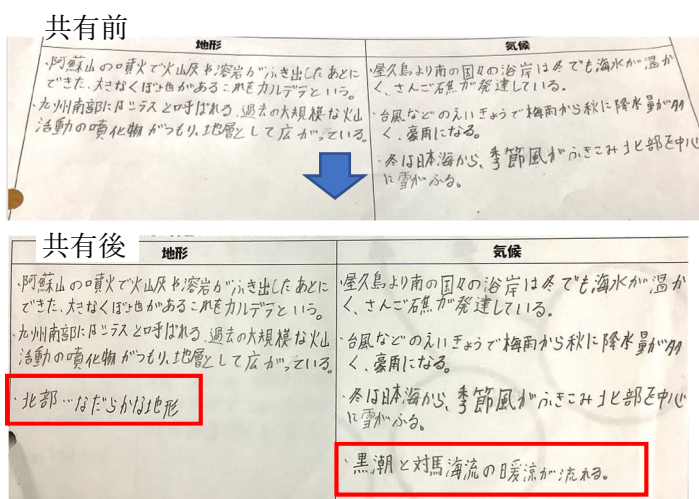
1時間目は、九州地方の自然環境の特色について、地形と気候に分けて調べさせた。各班とも話をしながら、トピックごとの情報を教科書から読み取るなど、協力して進める姿がみられた。図1、図2は、学級での共有の際にロイロノートで提出させたワークシートである。2枚とも火山活動に由来する地形の特色、温暖で多雨な気候の特色について読み取ることができている。

また、共有後では、班活動では出てこなかった情報を書き加えている。自分で教科書や地図帳、タブレットを開き、自ら必要な情報は何かを考え、取捨選択してノートに書くという主体的な活動と、班で情報を整理する活動、学級全体での情報共有を通して、各学習内容で身に付けておくべき知識を読み取らせることができた。

3時間目の自然環境を生かす九州の産業の学習では、講義形式の授業では、集中が続かず、落書きをしてしまうな

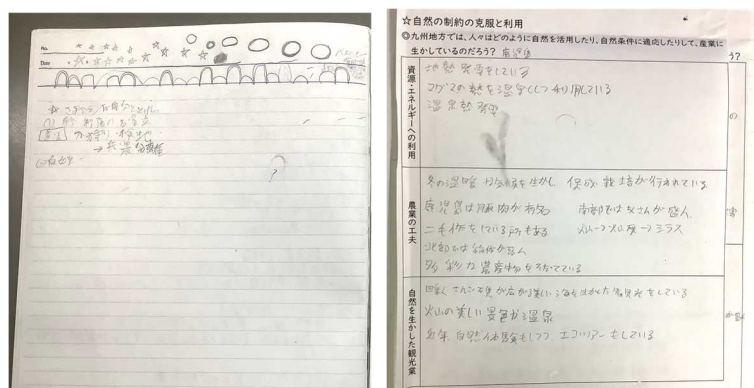


【図1 共有前後の生徒Aのワークシート】



【図2 共有前後の生徒Bのワークシート】

ど、ノート半分も書けなかった生徒Cも教師の声かけや班長のサポートを受けながら、ワークシートを埋めることができた(図3)。



【図3 生徒Cのノートとワークシート】

2. 考えを総合しなければ述べられない学習課題の設定

単元の導入で「将来どんな場所に住みたいか」という質問をしたところ、「近所にコンビニがあるところ」「色々なお店などがあって便利なところ」「物価が安く、交通が整っているところ」など、経済や交通を意識した回答が多かった。一方、「弥生時代にタイムスリップしたら、どんな場所に住みたいか」という質問には、「川と森の近く」「食料がたくさんとれるところ」「米作りに適した場所」など自然環境を意識した回答が多かった。生徒も科学の進歩により、自然を克服してきたことを知っていた。同時に地震や台風などの自然災害は毎年のように人々を苦しめていることも知っていた。そこで、「自然を克服できた/できていない」の2つの立場で捉えられることを伝え、「九州地方の人々は、どの程度自然を克服できたと言えるだろう?」という問いを立てた。

その後は、教科書の順に従い、IV1の流れで学習内容①～④についてまとめさせた。また、学習内容①～④の内容を南魚沼市に置き換えるとどうか、ということを中心に意識させることで、自分と学習内容とのつながりをもたせ、読み取った内容と既習事項等とを関連付ける手がかりとした。

【表2 生徒Dの学習活動と単元の学習課題に対する記述】

学習内容	生徒に与えたトピック	生徒Dの記述(一部抜粋)
①自然環境の特徴	・地形の特色	活火山が多く、噴火による被害が起こる。 噴火によって地形が変わることもある(カルデラ)
	・気候の特色	黒潮と対馬海流という2つの暖流が流れていて、冬でも比較的温暖。
②自然環境への対策	・火山や地形との関係	(火山灰に対して)路面清掃車が道路清掃をしたり、 …噴火情報をメールで送るサービスをしている。 (土砂災害に対して)シラスが広がる地域は土砂災害が起りやすいから、砂防ダムをつくっている。
	・気候との関係	(強風や豪雨に対して)家の造りを強くして、激しい風雨にたえる家を造っている。
③自然環境への適応	・資源・エネルギーへの利用	地熱発電をしている。マグマの熱を温泉に利用。
	・農業の工夫	冬の温暖な気候を生かし、促成栽培が行われる。
	・自然を生かした観光業	暖かく、さんご礁が広がるきれいな海を生かした観光業を行っている。

④環境保全と産業の発展の両立	・北九州市の取組	1960年代に大気汚染などの公害が発生した。
	・水俣市の取組	1956年に公式に確認された水俣病（四大公害病）…。
単元の学習課題に対する記述	克服度 90%。火山を生かして、温泉や地熱発電や、きれいな海をつかった産業、気候や土地を生かした農業をしているし、火山の噴火による火山灰の対応、噴火情報のメールなどもしていたり、山にダムをつくったりして防災対策をしているけど、公害とかも起きているから。	

生徒 D は、学習内容①～③で読み取った、九州の地形の特色として火山の存在があげられること、温泉や地熱発電という形で火山のめぐみを受けていること、自然環境を産業に生かしていること、火山の噴火や台風などによる土砂災害への対策をしていることを、自然を克服できていると考える理由として挙げた。一方で、学習内容④で読み取った公害の問題が起きていることを、自然を克服できていないと考える理由として挙げ、それを根拠として 90%自然を克服していると記述している。単元の学習課題に対して、学習内容①～④を関連付けて判断することができた。

生徒 D のように学習内容①～④のすべてを総合して、まとめの記述をした生徒は多くはなかったものの、2つ以上の学習内容にふれたり、ニュース等で見聞きした九州の災害の情報などにふれたりして記述することができて生徒は多数見られた。

V. 成果と課題

1. 成果

(1) 肯定的評価の増加

【表3 実践前後の授業アンケート】※表の数値は、2クラスの合計(2回とも回答数60人)

質問項目(要約) (肯定的回答←1・2・3・4→否定的回答)	4月(%)				9月(%)			
	1	2	3	4	1	2	3	4
A 資料から情報を正しく読み取ることができていますか。	10	58	23	8	17	52	27	5
B 自分なりの考えをもつことができていますか。	12	45	35	8	27	42	27	5
C 複数の情報を関連付けて考えることができていますか。	8	32	43	17	17	40	33	10

質問項目 A では、情報の読み取りについて、「1」と回答した生徒が増えた。これは、一人ではなく、班で協力しながら調査し、整理する活動をしたことや学級全体で共有する場を設けたことが背景として考えられる。質問項目 B では、考えを持つための根拠となる情報を、班および学級での共有を経て確認できたことや、南魚沼市と関連付ける活動を通して、より多くの生徒が自分なりの考えを持つことができたと考えられる。質問項目 C では、学習内容の関連付けが不可欠な学習課題を設定したことや、調査・整理・共有のユニットによって関連付けるべき情報を自ら習得したことで、複数の学習内容や既習事項等を関連付けて考えることができたと考えられる。

(2) 学習活動への参加

可能な限り私の話を聞くだけの時間を排除し、生徒の活動の時間を増やしたことや、班内での情報共有を密に行う活動によって生徒個々の学習への責任を明確にしたことで、より能動的に学習に参加する生徒が増えた。また、今までより能動的な学習を行ったことが、情報を読み取る力

や情報を関連付けて考える力の向上にもつながったと考える。

2. 課題

(1)資料の読解力や関連付けて考える力のさらなる向上に向けて

表3より、質問項目Aの肯定的回答は41から42に増えたに過ぎず、大きく改善したとはいえない。実際、自分ではどこを書けば良いかわからず、班員の記述をただ写すだけの生徒もいた。班活動を中心に情報を読み取る活動を重ねるとともに、より有効な手立てはないか考えていきたい。

質問項目Bでは、肯定的回答が24から34まで増加したものの、否定的に回答した生徒が半数に近い26人もいた。単元のまとめの学習でも、複数の学習内容や既有知識を関連付けて記述できていない生徒もいた。今回の実践では、学習課題を考える上で、学習内容①～④と既有知識を自ずと関連付けるだろうと考えていたが、もっと具体的に生徒が情報を関連付けられるような手立てが必要であった。

また、生徒D(IV-2)は質問項目Aに「2」、質問項目Bに「3」、質問項目Cに「3」と回答した。表2(IV-2)の通り、情報を読み取り、情報を関連付けて、自分の考えを記述しているが、それを自覚できていないようである。同様の生徒が複数見られたほか、逆に十分とは言えない生徒が「1」や「2」の肯定的回答をしている場合も見られた。生徒に自分自身に何ができていて、何ができていないのかをしっかりと自覚させていくことも今後の課題であると感じた。

(2)支援を要する生徒への対応

全体としては学習に積極的に参加する生徒が増えたが、学習に興味を持たずに寝てしまったり、ワークシートを白紙で出したりする生徒も少数ながらいる。班長の声かけや教師の支援があっても、今回の実践中には改善できなかった。今後は、そうした生徒の学習意欲を喚起する手立てを考えるとともに、学力低位で活動に取り組めなかった生徒に対してどういった支援が効果的であるかを考えていくことも必要である。

《参考文献》

- ・文部科学省 中学校社会科指導要領(平成29年告示)解説 社会科編(2018)
- ・草原和博・大坂遊編著 学びの意味を追求した中学校地理の単元デザイン(2021)
- ・アーリック=ポーター著・月谷真紀翻訳 Lean Better—頭の使い方が変わり、学びが深まる6つのステップ(2018)